

2/5 付の新潟日報朝刊で掲載されたと  
おり、新潟教弘、新潟日報主催「特色あ  
る教育実践校」の教育実践論文におい  
て、二葉小学校は「優良賞」を受賞しま  
した。これを契機に、今後一層の取組推  
進をお願いします。(教頭)

## いのちを大切に、守る教育活動の在り方 ～地域ネットワーク「二葉ネット」を生かした試み～

新発田市立二葉小学校

校長 荒木 一成

### 1 はじめに

学校の教育活動で最重要視されることは何であろうか。「アクティブ・ラーニング」や「深い学び」というキーワードが、次期学習指導要領の柱となっていくようであるが、当校では、子どもが自他の「いのち」を大切にし、守ることが何より重要であると捉える。自ら命を絶ったり、他人の命を奪ったりする話題が頻発する昨今、「いのち」を大切にし、守る教育活動の在り方を探った。

二葉小学校区は、昭和 41 年、42 年と 2 年続けて水害



による浸水を受け、地域は避難や集団移転を経験している歴史がある。さ

らに新潟地震から 50 年、中越地震から 10 年という節目の平成 26 年度に完成した新校舎での避難の在り方を見直す必要が出てきた。そこで二葉小学校では、様々な教訓を風化させないよう、子どもに「いのち」の大切さについて学習する機会を教育課程に位置付けた。このとき保護者や地域、関係機関と学校とが連携・協働し、各々の役割と責任を果たしながら、地域社会全体で子どもの「いのち」を守る仕組みづくりを進めた。

### 2 実践内容

#### (1) 多様な主体のネットワーク化

学校が抱える課題は、様々な要素が関連していることが多く、学校だけで解決しようとしても望ましい成果を上げることは、困難であることが多い。そのため、学校を取り巻く多様な主体が連携・協働し、社会全体で課題解決を図る仕組みづくりが急務であると考えた。

二葉小学校区には、町内会が 15 地区存在し、それぞれが学校教育に対して理解を示し、協力的に行事等に参加している。そのほかにも、「おやじの会」「二葉サークル」「図書ボランティア」など、健やかな子どもの育成のため、様々なボランティア団体も存在する。まず、これら散在する主体をネットワーク化し、各々のもつ教育力を一層高める必要があると考えた。

そこで、「二葉小学校地域連携ネットワーク(以下、二葉ネット)」を立ち上げた。参観日当日等に会合を設定し、目指す子どもの姿や子どもを取り巻く環境づくりを継続的に話し合うとともに、授業参観を通して、実際の子どもの様子も見ていただく機会とした。二葉ネットでは、「無理をしない」「できる人ができる活動を行う」ことを大切に、地域全体で子どもを育むシステムとして、連携・協働を試みた。

二葉ネット(主な団体)
二葉地区町内会
民生児童委員協議会
二葉小学校 P T A
おやじの会
二葉サークル
図書ボランティア
二葉地区育成協
NPO ふるさと未来創造堂
新発田市地域安全課
新発田市社会福祉協議会
二葉小学校

#### (2) 地域と一体となった避難訓練

新校舎で初めての避難訓練となった平成 26 年度は、参観日に地震と津波が発生したという想定で行った。子どもと一緒に、保護者や地域の方々にも体育館への 1 次避難、3 階教室への 2 次避難をしてもらった。多くの目で新校舎での避難経路を確認してもらうとともに、学校では、子どもも教職員も真剣に「いのち」を守る活動を行っていることを見てもらうことで、子どもを取り巻く大人の意識の高揚を促した。参加した保護者や地域の方からは、「ガスの元栓を閉めた方がよい」「緊急時には、丁寧語でない方がよい」「避難経路を見直した方がよい」等の意見が寄せられた。子どもを取り巻く大人も、よりよい避難の在り方について真剣に考えると同時に、情報交換を通して保護者間の連携を図る機会となった。

この成果や課題を基にして、平成 27 年度は、学校の避難訓練に合わせて、地域も一斉に避難することを二葉ネットで話し合い、実行した。実施日の日曜参観日、参観していた保護者には正午前に自分の地域に一旦戻ってもら



い、正午の合図で、学校も各町内も避難訓練を開始した。15町内会中10町内が参加し、各町内で非常時の確認を行った。防災グッズの購入や独居老人宅の確認、その名簿作りなど、地域での防災意識の高揚が図られた。

平成28年度も前年度と同様に、日時を合わせて学校と地域が一斉に避難する取組を実施した。この時点で、地域の自主防災組織の組織率が、27年度初めの33%から、ついに100%となった。学校の取組が、地域の変容にもつながったのである。

また、その避難訓練に関連して、炊き出し訓練も実施した。担当してもらう主体は、母親を中心とした家庭教育学級「二葉サークル」と、父親を中心とした学校支援ボランティア「おやじの会」とした。子どもと教職員に行き渡るよう、約300食の豚汁作りに取り組んでもらった。この活動を通して、300食作るための食材の量や必要な道具、所要時間、役割分担等の情報を得ることができた。また、それまで話したことがない保護者同士が協力し合い、仲良くなることで、「また、こんな活動をしてみたい」「もっと子どものためにできることはないか」という気持ちを高めることもできた。



### (3) 1泊2日の防災キャンプ

新発田市は、閉校となった赤谷小学校を宿泊体験施設として改築し、今後、防災教育の拠点として使用していく予定にしている。当校では、対象を4年生と決め、市の最初の実践として取り組んだ。このとき配慮したことは、学校と行政だけで完結してしまう活動とにならないよう、二葉ネットを中心に、保護者や地域の方々から協力を得て実施したことである。

#### ① 川遊び、流される体験

校区を流れる加治川の上流で、魚を捕まえたり川で流されたりする体験を行わせた。子どもは、川は小さな水生生物などが生きている恵みの場所であること感じるとともに、自分の体が流される力強さや怖さもある場所であることを、体験を通して学んだ。また、2Lのペットボトルの浮力に驚き、いざという時にはペットボトルをはじめ、何か浮くものにしがみ付き、助けを



待つことを学んだ。

#### ② 地域で起こった水害体験の講話

50年前、校区の堤防が決壊し、地域一面が水浸しになった様子や避難したときの様子を、地域の方から話していただいた。「手で耳をふさいでござん。ゴーっという音がするよね。この音が雨の音とは別にずっと続いていて、そのあと堤防が破れたんだよ」「流れてきた何mもある大木が隣の家に刺さり、水の力で家ごと流されていった」「高台がなかったので、切れていない堤防の上に上がって、一夜を過ごした」など、具体的で生々しい話を聞かせていただいた。子どもは、「僕の家の前まで水が来たの?」「食べ物はどうしたの?」などに関心を寄せるとともに、洪水という災害が身近な出来事であることを確認した。



#### ③ 朝食を分け合う体験

子どもは、協力し合って体育館に段ボールを敷き、毛布に包まって夜を明かした。2日目の朝食は、40人の子どもに対して、30個しかないパン、牛乳、バナナと2Lのペットボトルの水10本だけであった。子どもは自分の欲しい物の希望を一旦ホワイトボードにまとめ、個数よりも人数が多かった物を半分にしたり、譲り合ったりした。また水は、自分の水筒に少しずつ入れて、次の人に回した。自分も欲しいけれど、みんなも同じであるという思いを共有し、自分も他の人も大切にすることを養った。



#### ④ 自分の地域の洪水時危険箇所調べ

2日目に子どもは、自分たちの住む地域に戻り、洪水になった時の危険箇所を調べて、地図に書き込む活動を行った。各町内の自治会長や防災担当者に地域の避難所や安全な避難経路、50年前の水害の様子などを教えてもらった。前日の講話を思い出しながら、子どもは真剣に活動に取り組んだ。その後、各地域で調べたことを持ち寄り、大きな模造紙に貼り付けて、手作りの二葉小学校区の防災マップを作り上げた。



#### (4) グラウンドでのテント泊体験

創設 10 年以上の「おやじの会」の活動も二葉ネットとして活動を進めている。毎年行われている学校でのサマーキ



ャンプも近年は、子どもに「いのち」を大切にする視点で見直し、実施している。かまどの作り方、薪のくべ方、テントの張り方などを、子どもに体験を通して学ばせている。約 50 名の会員の半数は、お子さんが小学校を卒業している方々であり、地域の子どもの育てようという思いとともに、愛校心や愛郷心の具体を子どもに示している。

#### (5) 「いのち」に関する読み聞かせ

図書ボランティアの読み聞かせ活動も、いのちの尊さを伝える本をいくつか取り入れてもらい実施している。学年



の実態に合わせて、赤ちゃんの誕生の話や一つしかないかけがえのない命の話を、読み物を通して伝えてもらっている。特に 6 年生へは、「葉っぱのフレディー」という作品を、プロジェクターを使って雰囲気を作り、「生きる」ことの意味について考えさせている。学校の教職員だけが教育活動を行うのではなく、様々な主体が、教育活動に参加・参画することで、子どもに対しての教育効果を上げている。

#### (6) 引渡訓練

平成 26 年度の参観日に大雨が降り、懇談会を中止して子どもを保護者に引き渡して下校させる必要が生じた。急遽、地域ごとに引渡しを実施したとき、地域担当職員が、その地域の親子を全ては知らないの、かなりの時間がかかってしまった。

そこで、保護者や二葉ネットの意見を取り入れ、次の引渡訓練には、引渡カードを用いて学級担任が確実に引き渡すよう改善を行った。

また、PTA 会長から、子どもの「いのち」を守るための仕組みづくりの必要性や重要性と、家庭での具体的な防災への取組を促してもらった。その後も、引渡訓練は P D C A の観点を取り入れ、実践し、見直すというサイクルで改善を図っている。例えば、事前に車で迎えを控えてもらうよう促したり、子どもと保護者とで歩きながら、災害時に注意する箇所の確認や

点検を行ってもらったりした。

#### (7) 「いのち」をテーマにした日曜参観の開催

多くの保護者、地域の方々、関係機関の参画を促し、互いに連携して各々の役割と責任を果たしながら、地域社会全体で子どもの「いのち」を守る機運の醸成を図る参観日を設定し、以下のような概要で実施した。

- 1 テーマ 『いのち』
- 2 目的
  - (1) 防災教育（自然とのかかわり方を学ぶ）、食育（健全な食生活を学ぶ）、人権教育・同和教育（人間尊重について学ぶ）を通して「いのち」について考え、よりよく生きる積極的な態度を養う機会とする。
  - (2) 学校、家庭、地域住民、及び関係機関との連携協働を図る機会とする。
- 3 期日 平成 28 年 11 月 13 日（日）
- 4 主な内容
  - 防災教育：県防災教育プログラムの実践  
避難訓練（地震・洪水を想定）
  - 食育：塩おにぎり持参、豚汁炊き出し
  - 人権教育・同和教育：（道徳授業の公開）  
副読本「生きる」を使った授業の公開
  - 二葉ネット情報交換会  
学校、及び各地域で行った地震の避難訓練や各種取組の反省を行い、二葉ネットで情報を共有し、来年度への見直しをもつ。

各学級で行う防災教育の公開授業は、新潟県が発刊した「新潟県防災教育プログラム」を拠り所とした。今回は、地震災害編の必須学習項目と選択学習項目を網羅するよう計画を立てた。その時、可能な限り地域の人材から授業に参画してもらうよう配慮した。

また、人権教育・同和教育に係る道徳の授業公開も全学級で行った。5 学年では、副読本「生きる」を用いながら学習を進めた。「しんじさんのノート」の授業では、それまでの「いじめられる人にも原因がある」という考え方が間違っていることに気付かせるとともに、いかなる理由でもいじめはいけないことや、傍観者もいじめる側であるという認識を深めた。子どもが日頃の何気ない言動が、いじめを生む原因になり得ることもあると気付いたため、自分の立ち振る舞いを見直すきっかけとした。いじめは大切な「いのち」を奪うかも知れない重大な案件であることを全体で確認し、相手の立場に立って考えることや相談することの大切さを子どもに学ばせた。

いじめている人は、自分がやられて嫌なことはしてはいけないし、見ていた人も見てみぬふりをするのではなく、ダメなことをしていたら注意しなきゃダメだ。いじめられている人も直接「やめて」とか「いい加減にして」とか言ってやればいい。自信がないのなら、先生や家族に相談すればいい。きっと力になってくれるから。

【5 年生児童の授業後の感想】

午後の二葉ネット情報交換会においては、子どもの挨拶や授業中の発言内容の質がよくなっていることを

褒めていただいた。また、各地域での安否確認の工夫について話題にし、成果と課題を共有した。

### (8) P T A 教養部主催「親子防災セミナー」

P T A 教養部による「親子防災セミナー」は、今年で3回目の開催となった。一昨年は東日本大震災で被災した方や、中越地震の教訓を伝える方を講師として招き、家庭において日頃大切にしなければならない観点を、親子で話し合わせる機会とした。

また昨年度は、写真やイラストをもとに、「我が家の非常持ち出しリスト」の作成を行った。カバンの大きさや中身の重さ、重要度、置き場所などの観点から、非常時に持ち出す物品や家族の約束事などを各家庭の実態に合わせて話し合った。

そして、今年度は「身近なもので防災グッズを作ろう」と題して、新聞紙からスリッパを親子で作った。活動を通して、十分な備えがなくても知恵を出し、協力することで「いのち」を守ることができることを確認した。



## 3 成果と課題

### (1) 成果

#### ① 子どものよい変容の姿

「いのちを大切にし、守る」ことができる子どもの具体的な姿を述べるのは難しい。しかし、毎年集計している児童アンケートの以下の項目で変容が見られた。

項目	H27	H28
友達に優しくしている	94.8	98.0
友達に優しくしてもらったことがある	94.8	95.6

教育課程に位置付けられ、年間を通して「いのちを大切にし、守る」教育活動を行っていることが、子どもの優しい心の醸成につながっていると考える。

また、防災キャンプを終えた4年生は、次のような感想を書いた。

物資の仕分けは本当に大変だったから、避難所に行ったら手伝いたい。人のために自分がゆずるということは苦しくて切ないけど、大切なことだと学んだ。私たちのために協力してくれた大人に感謝したい。

【4年生児童の防災キャンプ後の感想】

特別な作文指導を行っていない中で、このような感想を書くことができるようになっている子どもに、当校の目指す姿がある。体験を通した様々な活動をこれからも継続していきたい。

### ② 地域住民の意識の高揚

今年度、二葉ネットの団体である二葉地区町内会長会の最重要方針に、「学校との連携」が位置付けられた。

また、1泊2日の防災キャンプには、40名の子どもに対して、2日間で57名もの地域の大人が直接関わり、指導的な立場で参画した。参画した方々は、「昔、地域で起こった災害を、子どもたちに伝えられて良かった」「子どもや学校の真剣な取組から、地域の防災意識を一層高めなければならないと思った」「来年は非常食ではなく、畑の野菜でできる食事をつくらせたい」など、地域にとっても価値ある活動にしたいという考えを述べていた。これは、学校にとっても地域にとっても画期的な出来事である。学校と地域が一層の連携・協働を図り、いのちを大切にし、守る教育活動を推し進めていきたい。

### ③ 保護者の高評価

「いのち」の教育を柱に学校経営を行ってきたが、保護者による学校評価「学校は、保護者や地域の方々の思いや願いを受け止めて教育活動を行っている」や「学校は、学校の教育方針等について分かりやすく伝えている」の項目において、それぞれ96.9%、98.6%と高評価を得ている。分かりやすいテーマを掲げ、話し合いの場を設けながら教育活動を行う形が、信頼と安心を生み出していると考えられる。

### (2) 課題

子どもの変容をより客観的に捉えることのできる評価を工夫する必要がある。大学等と連携を取りながら、今後、評価基準や評価方法を考案する。

## 4 おわりに

災害が発生したとき、学校は子どもの「いのち」を守ることを最優先に考える。そのためには、家庭や地域の協力が必要である。

「東日本大震災における学校等の対応等に関する調査研究報告書」によれば、94%の学校等で地震に対する避難訓練を実施しているが、保護者や地域住民、地域防災組織等と連携した訓練はほとんど見られなかったとの報告がある。また、防災教育については、80%の学校等で災害から身を守る方法を実施しているが、地域で過去に発生した災害についての学習の実施は少ないとの報告もある。

当校では、二葉ネットと連携・協働した「いのち」を大切にし、守る教育活動を今後も推進していく。